

## 男女共同参画ランチョンワークショップ

### 「優れた科学の芽を皆でサポートするために」

～ 今、必要な支援は何か ～

日 時：9月17日（木）12：00～13：00

会 場：信州大学理学部講義棟1階 第1講義室

世話人：日本遺伝学会男女共同参画推進特別委員会

研究の場を継続的に確保することは、多くの研究者が必ず直面する問題である。配偶者との別居や育児による負担は、さらに問題を深刻なものとする。男女ともに安心して研究に取り組むためには、どのような方策があるだろうか。特に、出産や育児の負荷の大きい女性研究者のモチベーションを保つためには、不安定な条件のなかで、どのようなサポートがあれば、これに対処することができるのか。昨年のワークショップに引き続き、若手研究者と指導者と、立場の異なる方々から話題を提供していただき、研究者をめざす若い有志を励ます機会とするとともに、望ましい支援のあり方を考えてみたい。

（司会：松浦 悦子 日本遺伝学会男女共同参画推進担当特別幹事）

#### 1 はじめに

五條堀 孝（日本遺伝学会会長）

#### 2 パネルディスカッション

##### ★ 研究者コミュニティにおける家庭生活の多様性

矢倉 勝（国立遺伝学研究所）

仕事と家庭のバランスを保つことは、継続して仕事をする上で重要である。しかし、昨今の任期制限が無い常勤職の大幅な不足では、夫婦で同じ都市、時期に、専門に特化した職を維持することは、非常に困難である。「優秀な」人材が、安定した仕事を求めてアカデミアから離れて行くことは、この業界にとっても大きな損失となるはずである。家庭生活を切り捨て、仕事だけを優先する人達だけで構成されるコミュニティでいいものだろうか？

## ★ 研究を続けたい！！

小西 蘭（信州大学サテライトベンチャービジネスラボラトリー）

初めての非常勤講師，実習二つに講義一つ，研究員の職務に，週二日は出張と忙しい毎日の中，妊娠・・・。職場に母親研究者や同世代の女性はほとんどいない。辞めればお世話になった多くの人に迷惑をかける。立ち止まる暇はない。初めての子育てに戸惑うも近くに頼れる人はいない。研究も母親業も中途半端，なぜ私は研究を続けているのだろうと自問自答しながら，子供の健やかな成長のために母親支援が必要であることに気が付く。そして，あの頃も今も，私は優しく笑顔で応援してくれるロールモデルを求めている。研究を続けたい！！と思える今，何かを乗り越えたに違いない。私は母親研究者のロールモデルになれるだろうか。

## ★ 名古屋大学における学内学童保育所設置の試み

佐々木 成江（名古屋大学男女共同参画室）

子どもの小学校入学時は「小1の壁」と呼ばれ，出産時に次ぎ，仕事を断念する第二のピークとなっている。名古屋大学では，「小1の壁」を簡単に乗り越えてもらうために，全国で初めて，教職員や学生の子どもを預かる学童保育所（定員60名）を学内に設置した。安心して研究に集中してもらうため，最長9時までの預かりや夏休みだけなどのスポット利用など，ライフスタイルに合わせた柔軟な預かり体制を充実させている。また，大学に設置したメリットを最大限生かし，多彩なプログラムを実施することで，子どもたちの学ぶ力を育てることに力を入れている。

## ★ 男女共同参画を根付かせる制度の充実への提案

倉田 のり（国立遺伝学研究所）

多くの後輩や，学生，そこから上の年齢の女性研究者の変遷を見ていて，とても残念に感じることもある。日本の女性研究者がポスドク第1期を過ぎるころからその割合を急激に減じてしまうことである。海外の学会で広い年齢層にわたる多くの女性研究者の参加をみると，正直，なぜ日本ではそうではないのか歯がゆい思いがある。一方，日本でも女性研究者が長く生き残れる研究所もある。何が違いを作っているのか，公的，運用的，私的レベルの方策について考察を試み，解決策を探れたらと思う。

## 3 おわりに

伊藤 建夫（日本遺伝学会第81回大会委員長）